

義我太古雜誌

第壹號

壹

義太夫雜誌第一號目次

本誌の發行に就て

岡田 廉二

論 說

義太夫と國家の關係

古 曲
上るり十二段

饒 舌
竹本綾之助
竹本小土佐

祝 詞

義太夫雜誌の發行を祝す

武石 入之庵

綾之助の雜事

紫 山 人

義太夫雜誌發行の祝辭

甲田 倭文兄

かまりの事

同 人

義太夫雜誌の發刊を祝して

紫 山 人

がぎぐげこの事

鉤深亭 主人

義太夫雜誌の發見を悦びて

竹本播磨太夫

かさねの事

小 雅 人

寄 書

三味線の權輿

加藤 尾花

つねく草

峰の家 主人

傳 記

近松門左衛門小傳

服部 霞峰

前年中の記事

戯曲 狂夫

批 評

近松戯文評

情 農 子

雜 報

○練磨會の發會式○三絃の二名家○女義太夫の樂屋○龍虎神田に戰ふ 外數件

小野 阿通

七文字屋微笑

竹本綾之助短評

夜明亭 主人

餘 興 三絃之友

峰の家霞 撰

義太夫雜誌

第一號

明治廿六年
一月三十日 發兌

本誌の發行に就て

予元より淺學寡聞文事に拙なり而て此圖あり自ら其大膽に驚く然れども義大夫謠曲の道をして優逸に發達せしめんとの熱心の予を促がして遂に爰に至る是予が拙を省みるの暇なき所以なり

會員並に江湖愛讀者諸彦若し予か志の探るあらバ本誌の爲に一臂の勞を惜む勿れ是予が諸彦に向て深く望む所あり本誌發行に際し一言諸彦に呈すと云爾

己一月廿五日

於雜誌編輯局

岡田廉二

論說

義太夫と國家の關係

我國の民の言詞にとり故に古傳の口牌を以て歴史とせり唐土の人は語るに拙し故に文字を用ゐざるを得ざるの不便利あると國學者の云くさなるがては唐土に對して而已云ふべき事なり印度以西の何の國も皆言詞の國なり字と云ふもののみ只言詞の音を代表するまでの者なれば即ち我國に假名の五重音あるも同じ事なり唐土とても矢張結繩の前に蝌蚪の如き簡便なる五重音の代表する字のありしに相違なし我國とても「いろは」假名の前に神代文字の必ずありしならん唐土が今の形字を用ゐ來りし始は物の形に因て作りたる一種の便利法なり野蠻人が矢の形を画きて矢と讀み弓を繪きて弓と

し其弓矢の二物を合せて引といふ意味になぞらへ又其引と云ふ字の出來たる以上の何にても引のべる引つける様な意味の所へは何處にも用ゆるなり唐土の形字を用ゐ來りし起は至極野蠻的の工夫あれども却て讀み習ひたる上の讀むにも甚だ簡便なり書くにも甚だ手短かかれバ追々に其用法を改良し且字數を増殖して今日の數までに至りしは既に二千年も前なるべし假令の人士にして世欲の益なきを觀ひらき山に入り天壽をのかるを仙と書きしは山の人の意より作りしあるべし又仙を僊とも書く其僊になぞらへて牡馬の精を斷らしものを驪とす若し又牛なれば牯と書くも差支なし我國の俗語にて「きんきりむま」など云ふより余程雅にして簡便なり今我國にても其簡便法を輸入し來りてより最早二千年にも近ければねひ／＼之に泥み來りて今の言詞も七八分の漢語まじりとなりて純粹の和辭は失せて文法語法も動詞のまげ方も「てにをい」も云ふものはなくな

りたれば文法を解くこと甚だ難し如何となれば漢文に自ら其文法あり和讀にり又其法あれバあり文明諸國にても印度にても皆文法書ありて小學校には必要の教課書とす然るに我國にてり我文法を精しく知るもの大學生にも稀なり豈遺憾ならずや先頃かなの會の生れありて日本の通俗字を皆かなにせむと圖られし人々も多くありて誠によきとは思ひしもかなを用るの法則を先に建てたるものにあらざれば遠からず立消となるからん現にかなの會の名稱でさへも關東の本部でなかのかいと書き關西の支部ではかあのかわいと書く程の違ひあり加之形字の音には同一のもの多ければ混雜を來すこと多し例へば酒はしゆなり朱もまゆ主もしゆ種もしゆなれば所によりての醫者と石屋よりも間違やすし故に假名を以て俗文を編み貫かんとするに何處迄も古に溯りて純粹の和詞を用ゐ只電氣とか水雷とか云様を當世の實用語のみ漢語又は洋語にて用るとす

るより外かゝるべし然れども是又容易のことに非らず
されば通俗の文通俗の語は何を以て基礎とするか何の
体に習ふて可なりとするか曰く詞の義太夫に準らひ文
章も亦た義太夫本の様に可成漢語を少く交せ可成假名
を多くして書くべし如何なる鄙僻の地にても義太夫の
詞を解せず義太夫の文句を讀み得ざるもの希なるべ
し今の國文は漢文の直譯あれば通俗の語と大に差ある
が第一の缺點なり何れの國と雖も口に云ふとと文に書
くことの日本程ちがひある國はなし故に若し外國人に
して日本語を習ひ覺ゆるも文を書くを得ず若し文を先
に習ふも俗に語ることを得ず甚しきかたわの國ならずや
英國の近世迄もイギリス○スコッチ○アイリス○ウエルス
等の異邦人種に據の國にして各元首を異にせし故に處
々にて俗語の差のあれども基礎となる英語と云ふもの
ある故に何處へ至るも甚しき不便を感ずることなし我
國の二千五百年以來帝王統一の國なれども漢語佛語入

り亂れ固有の倭詞を蹂躪たる上豪族各地に割據したる
弊害にや薩摩と仙台の如く大に其詞を懸隔て今は甲乙
どもに殆ど解し得べからざるもの多く庠序の教育も亦
之を化するは甚だ難し然るに義太夫謠曲ハ普通教育外
に立つも大に之等の弊害を矯め全國の言詞を統一にす
るの力あり故に教育家も亦之を翼賛するの義務ある可
し

(以下續出)

祝詞

義太夫雜誌の發行を祝す

中外商業新報

武石八之丞

義太夫雜誌出たり今や海内靡然として泰西に象るの時
已に我義太夫謠曲袖手爲す所あくんバ徒に鄭衛視去せ
られんとす洋學の東漸してより未だ幾子もからず官爲
に核を設け民塾を立て奨勵し老となく幼となく子女士
夫が貴賓の間に高唱するの曲は早く已に此洋風の爲に

龍斷せられたり然りと雖も古人曰はずや詩百篇一言に
して之を蔽ふ曰思邪無しと思邪無ければ則鄭衛と雖も
豈儒夫をして起たしめ頑褻をして廉ならしむることな
しとせんや是實に移風易俗の效に於て一言にして彈か
るゝの理あらんや當に彈かるゝの理あるのみあらざり社
會の趨向上風教を保つの一分子として憚からざる也茲
に有志義太夫雜誌あるものを作り之が由來を演繹して
社會に必要な事を天下に呼號せんとするに膺り會末
某平生の所見を述べて祝辭に充つと云爾

義太夫雜誌發行の祝辭

甲田倭文兄

竹本と曰ひ豊竹と曰ひ鶴澤と曰ふ其姓鼻祖其人の通稱
なるや將藝道に因りて命たるの名歟开を論るは姑く措
き竹本豊竹の名は八千代の節細やかに直なる聲の伸あ
ると云ふに起るとし鶴九皇に嘖き聲蒼空に聞ゆ皇の澤
なり是亦音の朗々なるに因りてならん竹に鶴に幾千年

の今日まで榮えつるの特に此義太夫の節譜あるのみ今
回斯道を業としぬるもの業とせざるも斯道を好むもの
打集ひて斯道に關らふ雜誌を發行し竹といひ鶴といふ
の名に負かず齡久しく彌榮えんことを計らるゝのいと
も愛度事にこそと聊思ふまゝを書つけて雜誌の初生を
祝ふにかん

竹になそらへて

此君の直なる姿見つゝあれば尙節をこめて伸榮なん
義太夫雜誌の發刊を祝して

紫山人

やみに迷ふて居る身を照し手を引便なる雜誌

義太夫雜誌の發兌を悦びて

竹本播磨太夫

れくる香をみちのしをりやうめの花

寄書

三味線の權輿

加藤 尾花

抑も三味線の濫觴に就ては諸説紛々異同ありと雖も百八代後陽成院の文祿元年始て琉球より渡來せる蛇皮線に起因し摸して發明せしものにして角澤つのかさ（或書に澤角あれど非なり）檢校是を以て小野ね通が作ある淨瑠璃物語に調節を附し語り初めたるは實に動かす可らざるの説なり今參考の爲め余が記憶に存する二三の説を擧げ併て所思をも陳辯せん

糸竹初心集 抑も本邦に三味線を彈初めしは文祿の頃たひ石村檢校と云へる琵琶法師或時琉球の島に渡りけるに小弓と云ひて小さき弓に馬の尾の絃三筋を掛て鳴らすものあり石村檢校此小弓を京都に持歸り琵琶を崩して始て三味線を發明せり此を琉球組と名けて門下虎澤檢校に傳ふ虎澤尙ほ工夫を凝して組端手と云ふ事を造り出す云々

琉球年代記 後柏原院の御宇梅津少將と云ふ人生賈音學に委しかりしが應仁の兵亂を避て長門の國なる大内義隆に寄り玉ひしに義隆の臣陶晴賢密に少將を害せんことを謀しかば義隆此事を知て少將を毛利元就へ托し同地へ向て海路を航しまらする際其船難風に遇て琉球へ漂着したり琉球の王族兼城の按司深く憫みて少將を家に潛匿ふ按司の娘能く月琴を彈けり少將の元來音律に巧かりしかば立所に學ひ得て月琴の妙手とはありぬ少將遂に此女に通じて夫婦となり共に月琴の名國中に高かりしかば尙元王此由を聞て夫婦を召し月琴を彈せしむ其業の妙なるに感じて夥多の引出物を賜ひ日本へ送り歸さしむ永祿五年の冬少將夫婦豊前の國に着き同國石田村に隱遁して一子を産む幼名石磨後誓となりて石村檢校と云へる此人あり月琴の秘曲を父母より受けて其形を變じ丸胴を角胴に製し八乳の猫の皮を以て張り一種の樂器

を製出す是三味線の初みあり云々

竹豊故事 三味線は永祿年中琉球より渡り來りしを
其頃琵琶の細工人京都の龜屋市郎右衛門石村と云ひ
し者此三絃を摸し作れり琉球にては其胴を蛇の皮に
て張るといへど我朝に斯る大蛇の皮なし依て猫の
皮に換て是を張たり云々(中畧)淨瑠璃三味線は角澤
檢校を元祖とす角澤の澤の縁を取て後世淨瑠璃三味
線を産業とす者竹澤野澤鶴澤富澤等と云なるべし
余按するに糸竹初心集並琉球年代記等石村檢校のこと
を記す然れども淨瑠璃大系圖には昔て石村檢校の名を
見ず是れ或り石村吉左衛門(市郎右衛門)を誤り傳へたる
にはあらざるあきかされば京都及び浪花の三絃師に石
村の姓を名乗るもの多き此吉左衛門に出たるならん且
初心集に門下虎澤檢校に傳ふと雖も虎澤は角澤と同く
物組瀧野檢校より出で彼れは長崎端調の元祖と呼べれ
是れは淨瑠璃太夫並三味線元祖と稱す此間石村檢校な

るものあし然れば琉球年代記の梅津少將並に一子石磨
のこの如き或り後人附會説ならんか
前陳の如く區々孰れか是孰れか非を辨ずるに苦しめり
下つて寛永の頃より漸々隆盛に趣きて當時は専ら警者
の業として酒宴遊興の筵席必ず其技に妙な盲人を招き
て彈唄せしめしを後年に至りては貴賤男女自ら彈き自
ら唄ひて大に稱揚したるを以て三都其他に名人競ひ起
り各枝葉を分ち流派をなして目下此技を嗜まざるもの
なきに臻る亦隆なりと謂つべし
抑も三味線の丈り其始は三尺なり是天地人の三才を表
せり棹の長さ二尺余は陰陽の二氣を象り海老尾の五寸
は天の五星に準ず胴の周圍六寸四方に造るは地の六合
を表す胴の厚さ三寸は高下平の三形を象れり轉手(絃
手又は天柱或は轉軫)は天の象を表し反首に半月の形
を摸す三の糸捲は虚精。陸順。曲順。三台の星に配べ則
一の糸を虚精と云ひ二の糸を陸順と號け三の糸を曲順

と稱一の糸に壹越。斷金。平調。勝絶。の四を兼ね二の糸に下無。双調。鳧鐘。黃鐘。の四を籠め三の糸に鸞鏡。盤涉。神仙。土無。の四を備へて三筋に三十二調子を配當せりされば其音色奇絶にして根本ある蛇皮線に勝り實に倭國の名器なり但し當時の三絃は古の制と少しく異あり總丈三尺一寸五分海老尾五寸二分掉長二尺五分胴幅六寸長六寸六分天手三寸五分あり

傳記

近松門左衛門小傳

服部霞峰

我邦淨瑠璃作者の泰斗と仰がる、近松翁は名を信盛と云ひ杉森氏通稱平馬平安堂。巢林。不移山人。皆其別號なり長州深川の産幼にして郷里を發し肥前唐津近松寺(一)近江國高觀音近に小僧(名九古)となり積學により住持(松寺の御坊とも云ふ)に(名を義)に進み數多の徒弟を養しが一寺の住職となりて

の衆生濟度の益少しとて其頃肉縁の舍弟岡本抱一醫を業とし京都に在るを幸これに寄宿し還俗して一條家に仕へ從六位に叙せられ居る事數年にして之を辭し俳諧師井原西鶴の門に入り京都淨瑠璃芝居都万太夫(万太夫にて藤壺の後の怨靈膝の花より)宇治加賀椽井上播磨椽あどの淨瑠璃狂言を書きしが後浪花に移り竹本義太夫に頼まれて「出世景清」と云ふ新淨瑠璃を書けり之翁が義太夫本著作の初めなり

(貞享三年二)當時世に行われし淨瑠璃は今の祭門の如きものにて花も實もなきものなりしが翁の著書出てより文句に注意し男女老幼貴賤と言語にまで差別をなすに至りしかば之より年を経るごとに名聲高く淨瑠璃を五段に綴りし翁が初あり世續曾我之也近松の起は前に近松寺に居し因ならむ國姓爺合戰「雪女五枚羽子板」曾我會稽山」此三種世に最も賞せられ近松の三傑作と云享保九年甲辰十一月廿一日死去す享年七十二葬地の攝津久々智廣濟寺にて墳墓は大阪八丁目寺町妙法寺にあり

辞世の文左に記す

代々甲冑かちうの家に生れながら武林ぶりんを離れ三槐くわい九卿けいに仕
へ咫尺しせきし奉りて寸箭しんげんなく市井しせいに漂たふよぶて商賈しょうこ知らず隠いんに
似て隠いんにあらず賢けんに似て賢けんにあらず物知りものしりに似て何
もしらず世のまかひもの唐からの大和やまとのおしへある道々
技能ぎけん雜藝ざぎ滑稽ごっけいの類るいまで知らぬ事ことなげに口くちにまかせ筆
に走こしらせ一生いっせいを嘯さぶりちらし今いまの際さかいにいふべく思
ふべき眞まことの一大事いちだいじは一字半言いちじはんげんもなき倒惑たうわくこゝろに心
の恥ちをわほいて七十餘しちじゆりの光陰くわういんれもへべねばつかな
き我世わがよ經畢けいひつもし辞世じせいのどとふ人ひとあらば
それ辞世じせい去いほとに扱あつかもその後そののちに

のこるさくららの花しにほり、

享保九年

入寂名阿耨院穆矣日一貝足居士

中冬上旬 不俟終焉期預自記春秋七十二才〇〇

残れとはれもふもれろか埋火うりひの

けぬまわたなる朽木くもくかきして

批評

近松戯文評

情農子

曾根崎心中そねざきしんちゆう(徳兵衛おはつ)上卷、徳兵衛とくべいゑ櫓らの下したに忍しのび
居ゐ、れはつ足あしにて喉のどをばつる所妙ところたがひなり、可斷腸べしたつはらわたを

下卷「此よのなごりよもあごり、しに、行身ゆくみをたどふ
れい、あだしが原はらの道みちの霜しも、一あしづゝにきへて行
く、夢ゆめのゆめこそあられなれ、あれがそれとか曉あかき
の、七つななのどきが六つむつなりて、のこる「つがこん
じやうじやうの、かねのひときのきゝたさめ、寂滅じやくめつ爲樂ためら
どひとく也

徂徠先生そらいせいせい云、近松ちかまつが妙處たがひところ、此中こゝちゆうにあり、外との是これに
て推おしはかるべしと、宇佐美惠助うさめゑすけ(名なの惠字ゑじは子廸しだ)
の話わたりなり

摩訶十夜まかじちやに云いふ

一曾根崎心中の道行の中に、何／＼として何／＼

と死に行身の道の霜、一足づゝに消て行と云所迄

作りしが、言葉盡て心たらず、いかに／＼と案じ

ほけたる、其頃伊勢の涼菟搦に來合れけるを悦び

、いかゞして取續けんや、御助言し給へと投かけ

たり、菟叟聞ながら、外の咄して酒のみ物云て笑

ひ遊び、門左衛門ひたすらに、すゝめてたのめる

にぞ、叟何やかや雑談しながら、夢のゆめこそは

かなけれど、成ともやり給へと云しに、近松大

に悦び、やがて作り入しとなり、まことに詞情の

盡たらんに、いと佳く轉じたる文体、すら／＼と

して、行跡のいかやうにも取つゞけやどきえ、彼

決前生後の文法なり涼菟の姜異の作者、明和二乙

酉年八月板

右は古素堂五十周忌追善の俳書

右小石川紅の東自書(以上俗耳鼓吹抄録附農子とは蜀山人の別号也)

竹本綾之助短評

神田 夜明亭主人(投)

永年の眞打株ぶけありて随分人氣もあり聲に至ては驚

の初音も仰山なれど中々よし然し義太夫としては如何

と云ふ人もあるよし節等も旨けれど指を第一には屈し

難し折々の艶聞の餘り感心せず何しろ若人にしてアノ

位やるとの感心書生に大うけ／＼と云つて容貌は左

様にも非らず顔の爪傷の小兒の時たとなしかつた証據

饒

舌

七文字屋微笑

微笑義太夫道に暗し而して此任を負ふ野心あるに

あらずあらざるなり(至極あいまい)所謂詮方なき

の結果然れども素人の評また一興ならん讀みて面

白けれバ賞むべし然らざれば勝手にすべし見るは

泉樂代は後にて宜ふべき

竹本綾之助

讀めぬにあらず讀まざるなりと暗に強記を誇り立派なるしかも萬能(膏藥と間違ふべからず)を含有する肉眼を有しながら無本の演藝の嬢のパラント眞似人のなきは内々御得意微笑もいゝいと賞する者の一人なり然ども玉に疵(顔の疵を云ふにあらず心配し玉ふな)調節の亂雜なるに一驚を喫せり聞く初め○太夫を師とし後綾瀨太夫の門に入ると是等幾分か其原因する處か可成り其是とする一方の節に偏せよ大家として立つもの、外の(微笑の嬢を大家と思はず)折衷主義の義太夫の歴史は好まざるなり然ども其美音と美貌の是等を掩ふの風呂敷となり人氣類なきの妙と云ふべし平常の動作金環の眼鏡に書生羽織活歩女學生然たるは書生間に好評を得る種か勢ひ音次郎を愛するに至る宜なり阿々

竹本小土佐

前年土佐太夫(今の播磨翁)と上京の折は齡僅に十有三

なりしも藝の思の外熟達なると片磨の愛嬌に聽者を嬉

しがらせしか幾程もなく病氣の爲に歸阪し年を隔て再

び上京なれば体度の悠然と語調の巧妙の年のね蔭ながら

音聲の一段落しもの、如し引語の三絃の腕を見せる

誇り八分との噂のあれど府下の人士は三絃に耳あるも

の少なければ最初の如く演技の一點張にしかず去れど

「辨慶」「御殿」などの毎も大受けは感心嬢の鬢近來

手古舞然たり奇に走る弊か或は天手古舞になるとの謎

か兎に角上品とは云ふべからず夫ともそんなじよそこら

からのね指圖とあれバ記者も、、、、

現今義太夫語に就て批評を試みられんと欲する人

の投書すべし但し記名投書の事紙上の匿名にても

よし

古 曲

此淨瑠璃十二段の小野れ通の作にして全篇十五段よ

りなる原本は六樹園の門人瀬川女皇の藏書にして元
祿九年丑十二月寫すとありて未だ刊本になき珍書な
り本社に幸之を藏し(復寫)本號より掲載して讀者の
覽に供せんとす

因に記す小野のお通の事を傳ふまぢく一説に
ハ伊豫松山老臣長隈吉兵衛の娘にして松平下総侯の
家老小野能登に養はるる故に小野氏を稱すとお通徳川
氏の奥侍女となり將軍秀忠公の姫入内ありて東福門
院とかり賜ふとき侍して宮中に入るも老ひて浪花の
かた鄙長柄村の草薙に寛永二年齡五十八にて没すと
云ふまた若年のとき信長の侍婢たりしとも云ふ

上るり十二段

小野通作

初段

さてもそのうち上るり御せんゆらひをくわしくたつ
ぬるにたうこくにあらひあしあらひあきこそをりあ

りちゝハふしみのけんちうあこんかねたかどて三川の
こくしありハハやハき長しやのひとりむすめびじん
ありかの長じやよろつにつけてわくたからを七ツまで
こそもたれける中にもしろかねこかねをハ水のあわと
そ思ハれけるされども長じや子を一人もまたせたまハ
ねハどころくハしゆくぐわんを申されけるされども
まけんしるしはさらにあしそのころ三川の國にハやら
せたまふみねのやくしハ參りつゝさまぐのしゆくハ
わんをこそ申されけるあむやくし十二神ねハわくハみ
つからにあんしにてもによしにても子たねをハさつ
けたまへくわんじやうじゆするあらばやハぎのいハに
七ツまであるたからものを一ツつゝまたいハにまへ
らすハしまつ一ハんにこんちのにしきのまもりを六十
六尺のかけねび尺のかつらハツはあかたのからのかハ
み六十六ねもて十二の宝箱をそへてまへらすべしこか
ねつくりのかたあ三十六こしそろへてらんかんわたし

てまいらずへし是をこれもふそくよ思おぼしめさはまばのそや
 を百すしそろへていかきよくみてまいらずへしゑろか
 ねつくりのたち百ふりそろへてまいらずべしこんちの
 よしきの御みとてふ月つきは三十八年ねんかけてまいらずへ
 しあけの糸いとよてまきたてにくろのこまねとし△本ノマ、三十三
 疋ひきつ、五ねひかせてまいらずへしかの御みどうの前まへよほ
 うらいさんをかざりたてこかねよ日ひをつくりしろかね
 よて月つきをつくりまいらずへしすゝめゑよてうかものま
 がりはつるのもどしろこのしもふりをもつて御おしや
 たんをたてかへ、年ねんよ一度どつ、三年ねんか間あいたたて、まい
 らすへしなんしよてもよしよても長ちやうしやをあわれど
 れほしめさの子こたねをひとりさつけたまへ是これをもねも
 ちいさむらのずの此御このみどうのなひじんよてはら十もん
 しよかきゝりはらわたつかんてやくしよなげかけあら
 人神ひとかみとなつて衆人さんじんよゑやうげをなし候さむらのん時長ときちやうしやを
 うらみたまふおとふかくきせいを申まをつ、二七日ふたしちにちこもら

れたりかくて百日のまんするあかつき佛ほとけは八はちじゆん斗ぼたう
 なるらうそうよへんしたまひつゝみなすいしやうのし
 ゆづをつまくり長ちやうしや御おせんのまくらかみよたち出いい
 かよあんしうけたまはれなんしかなけくどころあまり
 ふびんさよ八尺しちやくのかねのほうが八寸やうんよあり八寸やうんのかね
 のあしたか四寸よんよなるまでたつねまわれどもさらよな
 んちよさつくへき子こたね一人ひとりもなし子こたねのなきいわ
 れをかたつて聞きかずへしたかのぬまといふ所ところよいけあり
 かのいけのふかさ八まんゆじゆんなりなんぢかたけを
 申まをせの十六ぢやうの大このたいじやなり此大ひとしや人をねほくと
 り生物いさまのてうるいをほろぼしたるよよりあんちよ子こたね
 のなきぞとよやはきの長ちやうしややうまるゝことばかのい
 けのほどりよくわんねんどうあり此このどうまたつとき御お
 そう一人ひとりましますかの池いけの主ぬしゑようぶつせよとてよる
 ひるほつつけうてんをねこなひあんちよゑかうしたま
 ふかの御おきやうをてうもんしたりしくりきよよりてほ

どあくやのきの長しやに生れたりなんちかつまのげん
ちうなごんは人もあきたかきみねにすむわとといふた
かありねほくどりのかすをほろほすといへどもふれ山
のかねのこゑ御きやうをちやうもんしたるによりくけ
大名ど生るゝといへどもそのいんくわにより子たねも
あしさりあがらあまりにあけくもふびんさに子たねを
一人さすくるぞとて玉手箱をひらき玉つさをとり出し
長しやごせんのたもとへうつさせたまひけるぞと思召
打さめてくわんぎのこゝろかきりあしらひはひまへら
せけかふ申まくるま五百りやうそろへて長じやのもち
たる七ツのたからをみねのやくしへ一ツつゝまぶひし
ぶひにまいらせたりそのうち長しやほどあくくわい人
して目敷つもれば御さんのひもをどきたまふかれをど
りあけみたまへは誠に玉をのへたるとくかれは上るり
どぞあつたり此ひめ君よわれちか六人めのか六人
十二人あいそへ見めてうあい申ありきのふけふどの存

れどもはや十四才もありたまふえいかくわんげんにく
らからずちゝのために四十三の御子ありはゝのため
には三十七の御子とぞ聞へけるどにもかくにもかの夫
婦のねんよろこひ申斗はあかりけり

雑 録

綾之助の雑事

紫山人(投)

嬢は元大阪邊のものゝよしにて幼年の折母と共に出京
し日本橋區久松町の醫師某方ゝ寓其より東京各所の席
へ出で非常に評判よく遂に齡十四となりて眞打となり
たり(微笑曰嬢の師綾瀨太夫は至極不賛成ありしも鈴
木某特ゝ願しかは漸く承諾せしものありと云ふ)生來
伶俐よしして他の人が一段の稽古を終らぬ内はや己三段
をあげる位なりしと或時母と共に湯治へ行きて徒然なり
しかば母の爪弾きまで何やら一段語り居しと當時の貴

顯黒田清隆伯同宿けんくわん せいりゅう へくどう じやくは居りて其巧たかみなるを感かんし主人しゆじんをして
 呼よびきたらしめ一段かた語りきかせよと命めいせしは嬢ぢやう佛然ぶつぜんとして
 近頃ちかごろは湯治とうぢよ來りしよて人ひとに語り聞かせず強しむてとな
 れは當時たうじ東京各所とうきやう かくしよの寄席よせへ來られよと辞退じたいせしと又神
 田かみの小川亭せうがわ ぢやうへ掛りし折近せりきん傍じやうより出火しゆしはとん（殆ど十年前に
 て嬢ぢやう十四五才しよごの頃）他ほかの仲間かみかの狼狽ろうたひさわぐ中に嬢ぢやうは一
 人三味線等さんまいせん とうをまとめて持出もちださしめ母ははと同車どうしやして歸る途
 路みち傍はたに泣き叫なげふ子供こどもある故車こしやをとめて間まひしに火元ひもとの
 子こにて父母ふぼの行衛ゆくへしれぬと薄着うすぎにてさも寒さむそうに見え
 しかば己おのが羽織はねりを脱ぬぎて與あたへ小川亭せうがわ ぢやうへ取とてかへし席主あそび
 右みぎの譯わけを話し若もし此親こゝろに逢あはゞ綾あや之助のすけか慥たしかに預あづかりし
 と傳つたへ呉くれよと云いひ殘のこし我家わがやへ連歸つれかへり種々いろいろ勞いたはり程經ほどへ
 て其兩親ふたごゝに渡わたせし事ことありしと或人あるひとより聞きしまゝを記しる
 て貴社きやうに投なげず

誤謬の種々

翼々齋

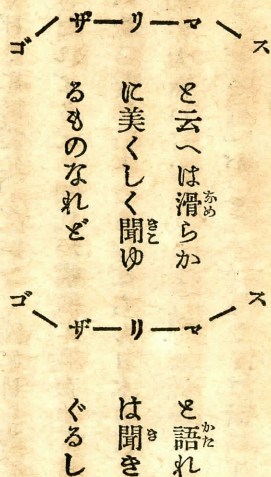
寫字あやまりの誤ごにて義大夫ぎだふ本の文句ぶんく崩くづれたるを又語人かたりての語
 崩くづすこと屢々しばしばあり今其一二を左に記す
 ○阿漕あこが切きりに「聲こゑに讀よむ字じをよみによみ迷途よみちへいろぐ
 一文字濱邊はまべをささて」とは頗すこぶる秀逸しゆいつの文句ぶんくかれといつ
 の間まにかは迷途よみちをめぐいとどかかつけれもまろみを失うしなふ
 たりこれの語人かたりての心得こころえわくより外ほかあし
 ○中將ちゆうしやう姫ひめに「寒邪さむや入いて死しするは定じやうさはあくとも性根しやうこん乱らん
 れ」をささめあくては性根しやうこん乱らんれとあり之も寫字あやまりのうちこ
 わゑからん

あまりの事

同人

平生へいせいの談話だんわにもあまりはいとねかな況まして義太夫ぎだふおど
 かたるものが謡曲うたがきの中なかにあまりを出だしては聞きぐるまぎ
 者ものなりあまりの辞ことばの中にいやらまぎ節ふしある地方ちゆうほうの辞ことば
 病やまひあればたやすく治おとす能あたはざるものあれどもよくく
 注意ちゆういすれば又治おとるものあり關東かんとうのあまりなほ概おほはまはり上かたり

あり例へは



若し關東役者と上方役者の間よ詞を聞き比ぶれば直に
 此ちがひを見るべし故に常磐津清元など關東生れの謠
 節に此なまり多し
 なまりは單にかしい位は聞ゆるのよけれど時としての
 意味までもあやまることあり例へは

ハ一シ 云へは膳の快子なり
 と云へは川の橋

キ一ツ 槌なり

チ一ツ は壤土なり

上方詞のかしら上りも亦あまりとなることあり例へは

孰盛卿を タ 次第と云へは賣つたる次第といふ様に

ウツ

聞ゆれば價值を聞たくなるなり
 タ 次第と云へは打



つたる次第に聞ゆれば軍の物語となるへし

女子の義太夫語りの糸と節と斗りに心をこめて習ふ故

にや詞のなまりに氣の毒ある程れかしなまりあり此

間も宮松亭の綾之助一座を聞たるに何れもふしはれも

しろかりしもなまりの甚しきには聞苦しかりき就中名

の忘れたれども聴衆が關取くと呼し語人の鈴やかな

る美音ありしがあまりがちにて詞が聞ぐるしかりき又

其あとに子染か出しか老若男女もよくかたりわけあま

りの少かりしは感心あり兎角なまりは其人の生れたる

所にあれば師匠たる人の出生地及其稽古の如何にもよるべければよく辨ふところ要用あれ

がぎぐげでの事

釣深亭主人

がぎぐげではかきくけこの濁あれば獨立の音あれども關東音のくせにんがんぎんぐんげんごと云ふ様に「ん」の音をかすかにからみ持つ之をローマ字にて書くときは (n) (ng) 等の如し素より今の清國の音にても西洋の音にても (ng) の前に (n) 多くつき (n) のあとにも (n) のつく例あれ米國の醫師へボン氏なども日本のがぎぐげでは慥に「ん」がつく様に自ら著はす辞書にも書きたれども之の同氏が横濱にて初めて日本語を習ひ覺へたる弊に染みたる故ならん日本古言の根據たる舊帝都の大和の日本語とて殆ど純粹なる場所あれ共がぎぐげではんがんぎんぐんげんごとは云はず記者の考にも「ん」の響を誠あるかなきかの様に至極かすかにつ

くるとき響自然と柔かにありゴツ／＼せぬ故にききものにしてたき自然とかすかにつくる様にすれば義太夫を語るにも節がゴツつかぬ所の妙ある様に思ゆれども殊更に「ん」を切りはめては甚だ聞き苦るし小政嬢か鰻谷を語りしとき「やんがて我身も大きうあり」と「ん」の音が餘りのつきりする故にローマ字に直すときは (yan-ga-te) と三綴にあり「ん」がのつきり上の綴につく故にあまり大阪の町中に住む女のふしには田舎めきてれかし之はこの嬢に限らず他にもかく語る人もあれと思ひ出せし序に記す可成りやんがと「あ」のうみ字を引きて「んが」の様に聞ゆるも「んが」とあらぬ様注意ありて如何之を識者に質ね申す

かさねのこと

小雅 人(投)

伽羅累物語の主人公たる累のことに就ばまち／＼の説ありて一定せず近頃近世奇跡考を見に左の事を記す因て貴社に寄せ同好の士に示さんと欲す餘白を與へ

玉はらは幸甚

(羽生村累古跡)下総國岡田郡羽生村百姓與右衛門妻か

さね正保四年亥八月十一日夫與右衛門が爲に絹川に

れいて殺害せらる其所を今にかさねが淵と云ふ與右

衛門後妻をむかふること五人みなかさねが爲にとり

殺さる六人めの妻娘ぎくをうむぎく十三の年寶文十

一年亥八月中旬その母も又どり殺さる翌寛文十二年

子正月四日より累か怨靈又ぎくにつきて苦しめける

を同年三月十日尊き教化にあひてかさね成佛しぎく

一命をたすかりし事(死靈解脱物語)元祿三(新著聞

集)寛延二等にしるして八みおしれることなればくわ

しくしるすにおよはず案るに與右衛門堀越氏なりか

さね實名るいと云累の字かさねと訓ずるゆゑたゑか

はよびけるならめ甲藏寺の過去帳に俗名るいとある

を以て証すべきか

○苴蕉が(奥の細道)に下野の那須野にてちいさきも

のふたり馬の路を去たひてはゑるひとり小姫にて
名をかさねと云ふ聞なれぬ名のやさしければどかき
て曾良が句に

かさねとは八重あでしこの名あるべし

とありこれも累といふ名を訓によびしからめかさね

と云を聞なれぬ名のやさしとれもへる元祿の頃は

羽生村のかさねが事さまで世に聞へざりしにや

與右衛門後に剃髪て西入と云延寶四年六月廿三日

死す其子孫今もなほ羽生村にありて代々堀越與右衛

門と名告る當代にて西入與右衛門より五六代相續す

と聞ぬ。ぎく。長壽にて享保十五年戊五月三日七十

二歳にて身まかりぬ(今廿六年を去る百六十三年前)

同村羽生山法藏寺の與右衛門代々の菩提寺なり累

助。ぎく。三人の墓あり累助。成佛得脱の繪曼陀羅あり

明顯瑞祥録と云古書二卷ありかさね等が事跡を録す

法藏寺過去帳寫

理屋松真信女

俗名ろい 行年三十五
正保四丁亥年八月十一日

○初法名香譽妙 林

單到眞入童子

俗名助 三歳 寛文十二壬子四月十九日此年號は助得脱
の年なり 實は慶長十七壬子四月十九日死

榮譽不生妙譽信女

俗名きく 行年七十二
享保十五庚戌五月三日

以上

右に關する地圖を附するも左程必要と思ひぬ、今は省
きぬ

つねく草

峰の家主

吉田の御坊がつねく草の腹へらさむとて我思
ひをうこのかどなく筆にまかして書きつゝりし
ものなれど己かつねく草はこれとかはりてひ
もじきいらをこやさしためにつねくそこはか
どなく古き書物あどあらせし折めづらかなるも

のは永く覺え得んとて書きつゞりたきしもの也

こたび義太夫の雜誌出るにあたりなにかな書か
んものどれもひしかどないそではふられず下手
な考やすむもくやしけれつねく草のうち
より斯道にかゝるものをものみ寫しとりてこゝ
に記すことゝはなしぬ

○師走坊主

近松門左衛門作の夕霧の淨瑠璃は、傾城阿波の鳴戸と
題す、吉田屋の段、伊左衛門の詞に、「紙衣さはりがあら
いく、引けは破れる摺めの跡にしはす坊主、しはを浪
人」とあり、姿やつくしく便りなげなる者をさして、
師走坊主、しらす浪人といふ諺の昔しありし故に、かく
つゝけて書きたるなり、盆には僧の物もらふ事常なれ
ども、歳暮にはさる事もなきをいふ(用捨箱)

○淨瑠璃作者

此作者と極めて生意なるもの、むかしはなし、俳諧師ある

ひの遊人あそびにんなどなくさみに作れり、曆こよみと云上るりは西鶴翁さいかく作といへり、近世作者と極きわめて生意よわたりとあせるり、近松門左衛門ちかまatsuにのしまる、此人博學碩才せきさいにきて、百餘番の淨瑠璃じやうるり、悉ことごとく言妙不思議ごんめうふしぎをつゝる、元もとの月卿げつけいの家に使つかへ、本姓杉森氏すぎのしんにして、ものゝふの流ながれあり元祿のはまめのころ、京、みやこ万太夫まんたふが芝居狂言の作者たり、其後大阪に至り、竹本筑後たけもとか座の作者とす、世俗作者の仙ひびりと稱せり、平安堂巢林子そうりんしと號なづす、享保九のとま、七十有餘にきて卒しゆつす、みつから行狀ぎやうじやうの記を書すその末すへに、もし辞世じせはと問人とまあらは

それ辞世去程じせきよ扱あも其後に殘る櫻うづが花ま句くのい

其外作者の錦文流にしきぶんりゆう、紀海音きかいおん、西澤一風さいざくいつふう、竹田出雲たけでいづもと、みち近松が流りゆうなり、江戸に北條宮内きたじょうみやうない、岡清兵衛おかせいへいゑ、塚原市左衛門づかはらしざゑもんとあり、頃日きんじつに聞きかす(近代世事談)

○淨瑠璃じやうるり

或書曰

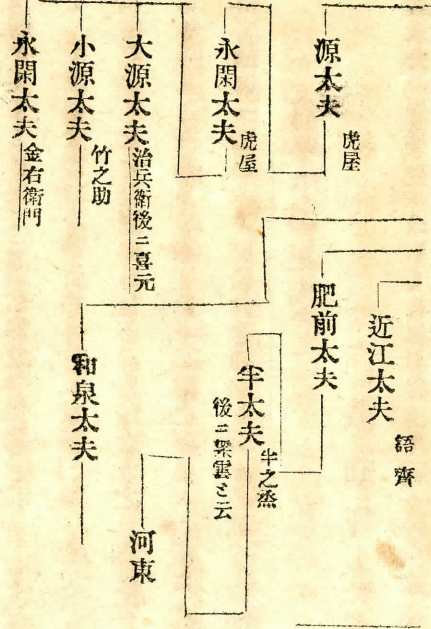
信長公の侍女小野おのお通つう秀才しゆうさいの女になり、後に秀吉公の簾中せふちゆうに遣つかふ、參州さんしゆう矢矧やがに淨瑠璃女じやうるりめが事ことを作つくり、藥師やくしの瑠璃光るりくわう

の縁えん十二神じふにかみを象かたり十二段じふにだんとま、淨瑠璃物語じやうるりものがたりと云ふ、平家物語へいけものがたりは、信濃しなの前ぜん司し行長ぎやうぢやうが作つくにて、生佛じやうぶつといふ琵琶法師びわはふし節ふしを付つたり是こゝの岩船いはふね檢けん核かく節せつをつくべしと也、即すかち岩船いはふね節せつを付つて、淨瑠璃といへり、其後瀧野たきのの、澤角さわつつのの兩檢校りうけんぎやう、三線さんせんに合あせて曲節きよくせつをかたる、又六字南無右衛門むつじふなんむゑもんと云女太夫めづたふ、四條河原しじやうがはらに芝居しばいを立たてる、慶長けいぢやうの頃ころ、人形にんがたに合あせて度々たびたび觀覽くわんらんに及びおよぶより、淨瑠璃太夫じやうるりたふの受領じゆりやうをいた、く事にことにあらり、京大阪江戸きやうおさかえどに淨瑠璃太夫じやうるりたふ多おほくなりて伊勢島山本角いせしまやまもとかく太夫たふ岡本文彌おかふみ、江戸油屋茂兵衛えどあぶらやもぢへいゑ、四郎與吉鳥屋次郎吉しじやうよきち、大さつま小さつま、れのがさまく色々の流儀いろいろのりぎあり

京加太夫節きやうかたふせつ 紀州和歌山宇治きしゅうわかやまうぢといふ所の者ものあり、伊勢島宮内いせしまみやうないに習なひ、宇治加太夫うぢかたふと云、此道名譽このみよのもの也、

受領じゆりやうをいた、き、加賀椽宇治好澄かがぐらうぢよしぢみといへり、諷うたひもよく名人めいじんの部ぶに入いたり

大阪井上節おさかいの上せつ 井上市郎兵衛いせしじやうへいゑと云もの也、道みちに達たち、京大阪きやうおさかにて鳴なる者もの也、受領じゆりやうえて井上播磨少椽藤原要いせしじやうはらふせうぜんとうげんよう



義太夫節に淨瑠璃に就

牧野竹園(投)

聲曲の優ある又辨をも待たざるあり樂と云稱するも
 の笛にまれ太鼓にまれ琴にまれ三絃にまれ期する所一
 にまて其調を得されば其律を明にせず其律正しからざ
 れば鼓するも其聲を發せず調するも其音を聞かざるは
 正に理の然らしむる者あればあり凡て樂なるもの天
 地陰陽四時風雨に象り金石絲竹匏土草木の八音宮商角

徵羽の五聲を備ふ故に其理を得たらんに上和下睦す
 之れ其徳なり

既に器あり鼓すれば四時の程を得彈すれば風雨寒暑の
 順を正すと宜なり之に和すの聲謠の出つる所以あり抑
 淨瑠璃の依て來る所を尋ぬるに其昔小野お通がよま
 るは浪花入江の蘆塩草かき集たる其中に左馬園義朝の
 主子牛若丸鞍馬寺の東光坊にまご舎那王と呼びつる十
 五歳の春奥州の方へ到らんとする途すから三河の國
 羽の宿の長が家に宿りま折淨瑠璃姫と云ん云ありてう
 が許に通ひたりま事のさまを十二段に綴りたるを岩船
 檢校節付を爲ま調べたるとかや之れ淨瑠璃と名づけた
 る所以あり其後種々の事を作りて此節に合しける其頃
 京都四條河原に於て河原節と云ひ江戸にても芝居町
 (今の柴井町)に於て盛にこの曲を始めたり大薩摩小薩
 摩四郎與吉七郎左衛門等の名手此時に現る後虎屋源太
 夫油屋茂兵衛鳥屋治郎吉南北喜太夫と次て起り益々

盛大を極む義太夫も亦其一なり聲曲の盛なる種々の謠
 ひ物節付をなすと流行し遂に河東節一中節常盤津新内
 清元等并起る蓋し依て出る處一にして曲の精妙音調の
 餘音人をして感想を其域に投せしめ轉聲曲の奏する歡
 苦は身外にあるを識別せざらしめざるに至り殊に義太
 夫の曲に至ては俗耳も一層の感を起し抑揚の精微の遠
 く他の及ばざる所にして世態の現狀を寫し痴情の極戀
 情の尤忠膽赤心を摘し艱苦喜怒の別愛別離苦等人事の
 至情を奏するに至ては時に罪なき慈母を泣かしめ庸夫
 をして蹶起せしむる等皆然り特に文語詞趣に至ては大
 に本邦の雅致を發達せしむるの器械なり之れ義太夫の
 最も長する所然りと雖も會々鄙俗に流るゝの語なきに
 非ず故に一二義太夫節に付き評論を試んと欲す(未完)

前年中の記事

戯曲狂夫(投)

義太夫の世界の賑はしくなれり従ふて種々の出來事も

あるなり今試みに前年中の重なるものを記し貴社に送
 る取捨に其意に任すのみ但し新聞に現れし日に因て
 記す

〔一月〕十二日朝太夫再び上京す

〔二月〕四日一六居士大に義太夫を研究す

〔七月〕二日綾之助公園の松本に遊ぶ

〔九月〕八日小土佐再び上京す

〔十一月〕十六日洲崎に義太夫流行す十九日友樂館

に於て友次郎三絃の妙手を揮ふ

〔十二月〕二日播磨太夫横濱に赴く九日義太夫謠曲

練磨會の發會式を江東中村樓に舉行す十六日

新橋に義太夫を盛に催す廿八日大隅太夫團平

再び上京す

雜報

○義太夫謠曲練磨會發會式の景况

去る十二月九日

江東中村樓ちむらに開ひられし同會發會式の景況を記さんに入口并に演臺やうたいの側そばに大なる八手の生花いけはなを備へしは羽團扇はうちりの鈴すずなりの様に見へ會場を特別、招待、會員席と區別し午後一時岡田壽樂氏の開會の主旨を以て開き次に釣深亭素樂君の演說該會員の演技かたりのものに優すぐれたる者あり中にも壽遊君の義作家の段は聲こゑに曇くもりあるも温ぬくみある様に聞え水の滲しみる様に普及あまわたりて興おもしろく今輔園遊の滑稽談こつげいたんは笑聲堂に満ち呂勢呂糸小土佐の演藝やうげい四才何ヶ月岡田玉子嬢の三絃と八才岡田小春か日吉丸の演藝は喝采かつさいと拍手はくしゆを以て満され大岸師の八雲琴は聽集耳きいてをすまして靜肅人なきか如し散會の午後十時頃にてありき

○三絃さんせんの二名家 めいじん 舊冬鶴澤友次郎に次で豊澤團平も上京せり其に之れ當代どうだいの名家一は厚生館一は宮松亭にて春來互たがひに妙技めうぎを弄あそぶ府下の人士何ぞ夫れ多福なる哉

○正義せいぎと陸りく 府中の藝人げいじん社會にては二派ふたつに分れて互に睨合にらみあひの由愛嬌專一の藝人にハチト不ふ似合になわげ速すみに和

解の上共々此道に盡すころ得策よきことあらめ

○女義太夫の樂屋 近頃はびやくや大分亂れし様子ありた灸頂あうてい戴たいせぬ内ねいさん達少しく注意ちういし玉へ

○仙花琴 琴の屋小仙氏の工夫にあるものにて其形琵琶びわに類たがひえ筆三絃ふでさんせんの代用かわりもする由かれはゆく／＼は義太夫にも適用てきせうせえめんといの意氣いき込まかりと價は三圓内外か

○興歌 本誌發行に際し會員松園氏より左のざれ歌を寄せられたり

あまさがる鄙ひなも都みやこもれしあべて

かはらぬものは淨瑠璃じゆるりのふえ

淨瑠璃じゆるりを聞きく語かたるもえらぬ身の

社員しゃいんにあつてかんとえやう園おのゝ

○新呂太夫の頓智どんち 客月きやくげつ芝小金井亭にて人形にんがた駒才三を演あせはし時初の示しめえ合せの丸こかしの處樂屋の都合にて庄兵衛しやべゑを抜ひす／＼と云いえも新呂の耳みみに入らざりえど見へ庄兵衛の出に掛からんとせえが突い然ぜん丁てい飛ひ出でせえか

の隙さず舍利詞にて「婿が来る〜」とつゝあき無事に終りしに流石新呂の腕ありとて見て來し人かわざ〜弊社へ來ての話

○龍虎神田に戦ふ 古叅の綾之助一名睦派の女將と新叅の小土佐一名正義派の女將とも之れ現今女義太夫社會の骨人氣の焼点者一に立花亭にあり一に小川亭に在り相闘たる僅かに數町互に輸贏を争ふものゝ如し諺に曰く同等の玉を同等の力にて衝突せしむる時は必ず一方損すと其損するもの誰の萩の方曰どちらも負てたもんぢやと記者また志此處にあり

○月次會 義太夫謠曲練磨會にては競技法として毎月一回月次會を催す由にて去る十六日外神田福田樓に其一次會を開られたり演技會員十數名あか〜盛ありし散會は九時頃因に日來月は十三日ありと

一日の用を終へ家内圍絡雜誌の際一の問題を出して

考物新題

笑談の中智識を研くも一快樂からん試に左の二問題を出す

- (1) 欲屬義須列九太夫首。
(2) 儀人去一人擁點 伴之者春一日空。

女義太夫五名家

在京中の女義太夫中其老若を問はず左の五名家の投票を募る用紙の半紙半面に認め堅く封まの上本社内七文字屋微笑宛送付すべし二月廿日切開票の上本誌第二號の誌上に報告す

皆當者への最高点者の見立もの景物呈上す

- 名望家 愛嬌家 美音家
巧藝家 美貌家

切一日も延引なま

餘興 曲
余興 曲子

三絃の友

○義太夫に關する事

娛祝儀

赤坂 梅林内 玉助

○我身につまされ思はず涙あはれな義太夫聞につけ

麻布 可愛道士

○聞なら義太夫楽しい中にいつかたぼゆる人のみち

越中 一杯亭丸香

○添へるようにと金毘羅さまへ願ふあしさへ百度平

赤坂 林屋内 梅助

○いやに見臺鼻たかくと来てはいせいを張あふぎ

湯島 寶亭 來升

○ふとい音色は内所へかくま上邊つくらふ艶がたり

下谷 小松家内 忍

○心は女の義太夫がたりきり、とうはべりれどこ鬚

新橋 春本内 吉松

○こころの竹本こめたる甲斐に節も細こふ出来た中

神田 紫山 人

○ぬしが賞れバ調子もはづみ語り榮さへある義太夫

下谷 空々家 瓢輕

○浮名にがくやをさぐられまいと顔も見せない簾内

淺草 流川居 漁舟

○今宵大阪五行の文字でうれまゆふ二人がかり合

本郷 二世 自升 醉士

○心ふと棹高坐へ出るも師匠のあまへをちからばち

羽前 壺天堂 狂花

○れ湯もわが子で試む乳母のこころも潔白な洗ひ米

神田 紫山 人

語る聲さへいつしか曇るぎれた赤繩のいもせやま

濱町 盛亭 當升

添ふて忘れた涙も嬉ま今日のサワリに泣かされて

瑠舞内 (本誌寄呈)

浅草 竹本愛之助

聞かせる外題も時雨の巨達女の實意をしらす氣で

評 其れ實意が峴川へ流れたら酌人は澤山

湯島 寶禮亭佳容

つくす氣にゐる親孝行もゆふべ義太夫きいてから

評 ぶから義太夫は國家の爲にゐるものさエヘン

神田 旭家ひかる

ほめるお方に心でおれいすきが義太夫かたるとき

評 あいゝ御心配とは安くあい

軸

れこがましくも一寸スケに出ました

お前三重奇麗に出れば私も之から地藏經 峰の家 霞

ハ文 句 入

來ぬ夜は貫ふた寫眞をながめ 竹本愛之助

廿四孝「こんを殿御と添臥の身は姫御前の果報ぞと。

いつか片類に出る懸

これ程眞實をつくして居るに 竹本小土佐

日昔丸「もしや見捨はあされぬかとほんにあらゆる

神様や佛様まで無理云て案じ暮まら甲斐も

なふ。

添はれぬ義理との情あい

たまの首尾には歸すもれえい 山亭 紫升

朝顔日記「語らふ問さへ夏の夜の短い契に本意あい別

又の逢瀬のしれぬ身は

東西々々是より次回の課題御披露仕 升

情歌 娘義太夫名前讀込

俳句 春季乱題「義太夫連舞滿久和意」内一字結

一名十首限二月二十日堅ノ切三光へ本誌一部呈上

入花無

廣 告

義太夫雜誌延刊御届

私 儀

去る十五日出版可仕等の處事務不整頓の爲不斗
延刊之段御説申上候就ては次刊よりは出版日を
大凡月末と相定め候間左様思召被下度此段御届
申上候

追白二號の二月廿八日發刊

一月三十日

義太夫雜誌社印

四方野愛讀者殿

ちらま。口上書。引ふご。の文案
のれもどめに應じます者は

峰の家執事

所は本郷區湯島三組町九十二番地

英文英書の翻譯

英文を和文に譯し和文を英譯する人多まど雖も其意味
を失はず其文法を過らずありふれたる語法「ロクシヤルに因てわか
まからぬ様に譯する人は甚た希なり廣告の力に因て賣
品の價直を高めんとする人約條書の判明からざるに因
て將來の葛藤を恐る等の人は本社の事務所に照會あれ

書畫文案意匠

應 依 囑

照會處峰の家内

眞

極鮮明にまて美麗 速寫にまて不變 速成にま
て廉價且約條日は必ず相違せざれば何卒御來寫
あらん事を希望す

鳥八十のとなり

寫

上野廣小路三橋側

吉川眞寫師

論説、記事、小説、戯文、情歌、俳句、三題、嘯、端

のりあいふね

唄、考物、とい一嘶、とつちりとん、粹と雅と

乗合船

に關する事は掲て漏さず極面白き雜誌二

月の五日は第一編出版定價一部四錢五厘

發行所 京橋區入舟町四丁目三番地 柳遊堂

馥郁 無類 麝香水 一瓶金十錢

馥郁

麝香水

化粧水には之に上とするものなし

實によい香のわりには安いですよ

發賣所 赤坂區赤坂新町一丁目十番地 露の家

この懷爐の奇麗で上等で丈夫で安直で其上立消せぬのが

專賣

爐懷

の特許價直がある所です

特許

嘘か實か チョン ためえて御覽あされませ

下谷區東黒門町三十三番地

發賣所 大橋 榮藏

社

告

○本紙の定價

一部前金三錢五厘十部前金三十錢

地方は一部に付外に郵税五厘申受

○廣告料

廿四字詰一行四錢十行以上一割引

但義太夫謠曲に關する者に限り五割引

郵券代用は二割増小爲替の神田郵便電信支局

宛振込にて受取人岡田廉二宛の事

發行所

東京市神田區紺屋町四十四番地

義太夫雜誌社

明治二十六年一月三十日印刷全三十一日出板

東京市神田區紺屋町四十四番地

發行兼編輯人

岡田 廉二

全市下谷區御徒町三丁目百一番地

印刷者

奥山東太郎